



## 図説ロンドンのタウンハウス



2015.10 改訂

佐藤 健正



## もくじ

はじめに	1
1 ロンドンのタウンハウス：概説	2
(1)タウンハウスの基本型 (2)ミュージズとミュージズハウス (3)タウンハウスとガーデン・スクエア	
(4)タウンハウスの町並みとその特性 (5)ロンドン・ウェストエンドのエステート開発	
(6)17～19世紀の住宅デザインの変遷	
2 ロンドンで最初のスクエア開発ーコベント・ガーデン・ピアッツァ	8
3 リンゼイ・ハウスー17世紀パラディオ建築の代表例	10
4 ロンドンしないに現存する17世紀の都市住宅	11
5 セント・ジェームズ・スクエア	12
6 ブルームズベリー	14
(1)ベッドフォード家のエステート開発 (2)ブルームズベリー・スクエア (3)ベッドフォード・スクエア	
(4)ラッセル・スクエア	
7 メイフェア	17
(1)グローヴナー家のエステート開発 (2)グローヴナー・スクエア (3)パークリー・スクエア	
8 18世紀初期のタウンハウス	19
(1)クイーン・アーンズ・ゲイト (2)ラグビー・エステート (3)スピタルフィールズのウィーバーズ・ハウス	
9 ジョージ朝ロンドンのタウンハウス	21
10 王室による都市開発：リージェンツ・パーク	22
11 サー・ジョン・ソーンズ博物館	24
12 ベルグレイヴィア	25
(1)ベルグレイヴィアのエステート開発 (2)ベルグレイヴ・スクエア (3)イートン・スクエア	
(4)ベルグレイヴィアのミュージズとミュージズ開発	
13 ビクトリア朝ロンドンのタウンハウス	28
(1)メルルボーン (2)ポント・ストリート (3)サウス・ケンジントン(4)ホランド・エステート	
14 アーツ&ラフツの住宅建築	31
(1)リチャード・ノーマン・ショウの住宅 (2)ハンズ・タウン (3)サウス・ケンジントンの	
アーツ&クラフツ・ハウス	
15 マンション・ブロックの登場ータウンハウスの時代の終焉	35



## はじめに

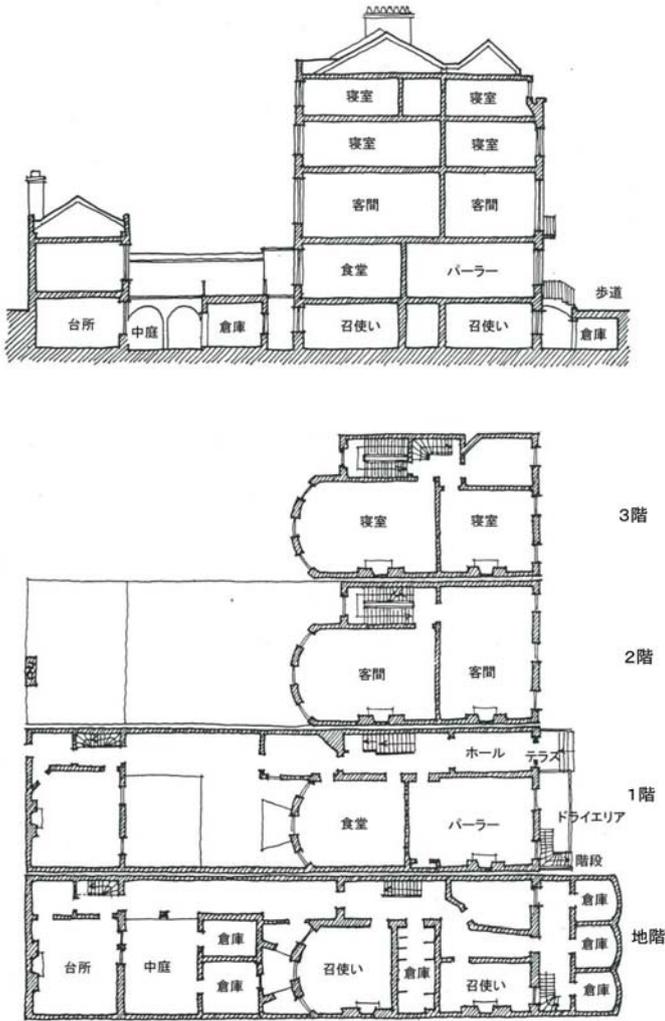
ヨーロッパの歴史的な都市は、いずれも伝統的な都市住居の様式を持っていて、それを今日に伝えている。都市住居は、まさに「都市を造る住居」であり、それぞれの都市に固有の町並み、都市景観を創りだしている。美しい都市は、美しい都市住居によって造られていると言ってよい。

ロンドンのタウンハウスは、そうした都市住居を代表するものと言える。ロンドンの町は通りや広場に沿って連続して建ち並ぶレンガ造りの住宅によって、その風景が創られている。これらの住宅は 17 世紀に始まり、18 世紀のジョージ朝、19 世紀のビクトリア朝にかけて建設されたものだが、数世紀にわたって生き続け、今日でも立派に都市の住居単位を構成している。タウンハウスに取り囲まれた緑溢れる共有の庭園広場（ガーデン・スクエア）が創り出す風景は、この町の魅力そのものを形作っていると言って過言ではない。

私はこれまでに 20 度ほどロンドンを訪れたが、その都度のタウンハウスの町並みを散策するのを楽しみにしてきた。そんなロンドンのタウンハウスの魅力、楽しさを伝えられればと思う。

注) 文中に掲載の写真は、出典を明記したもの以外はいずれも筆者の撮影によるものである。

典型的なタウンハウスの構成  
 ベッドフォード・スクエア (1775) の住宅



出典) N.ショウナワー『世界の住まい 6000 年  
 ③ 西洋の都市住居』

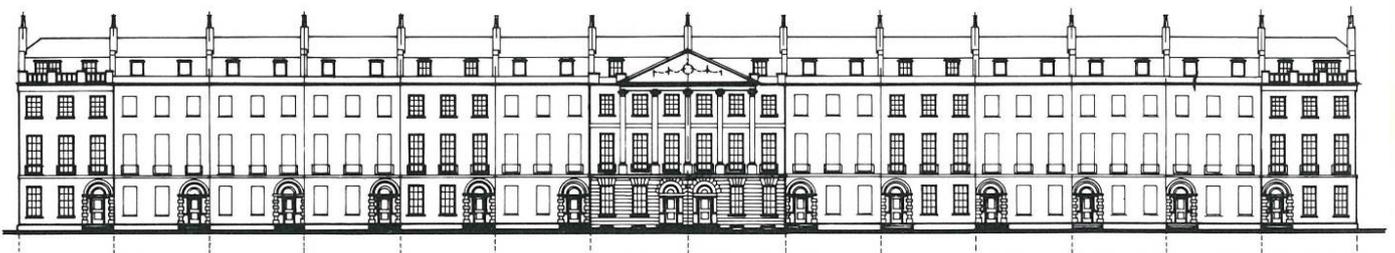
1 ロンドンのタウンハウス：概説

(1) タウンハウスの基本型

タウンハウスは、一区画に一住居、上下階に別の家族が住むことのない、連続建ての住居（ロウハウス）だ。間口が20フィート（6m）から30フィート（9m）と狭く、奥行きが深い短冊状の敷地に建っている。一階部分が50cm～1mほど歩道より高く、歩道と玄関をつなぐ階段とテラスが設けられているのでテラスハウス（terraced house）とも呼ばれる。歩道の端と建物の間には、地階に降りる狭い階段のあるドライエリアがある。一階部分が通りから一段高い位置にあり、かつドライエリアを前面に持つことによって、住宅は通りから守られている。一方で建物は通りに対して正面を持ち、窓際からは常に通りを眺めることができる。通りとの親密な応答関係を持っている点に都市住居としての特質がある。

建物の各フロアは、地階に石炭倉庫（歩道の下に設置されていて、通りから直接石炭を投入できるようになっている）、ドライエリア、倉庫、台所、召使いの部屋、一階にはホール、パーラー（居間）と食堂、二階に客間、応接間、三階以上に寝室といったように用いられる。

タウンハウスのファサードは、連続してひとつの壁面をつくり、連続的な町並みを形成する。連続する建物がしっかりと通りや広場を規定し、閉じた感覚をつくり出している。タウンハウスはそうした「街路建築」の典型でもある。



## (2) ミューズとミューズハウス

規模の大きなタウンハウスでは、敷地の背後にミューズ (Mews) と呼ばれる馬車を通すための路地が設けられ、そこに馬小屋 (Mews House) が置かれている。

この路地空間は、都会の喧噪を忘れさせる、静かで落ち着いた独特な雰囲気を持っている。

表通りのタウンハウスは、現在では大半が各階ごとに別の家族が住むフラットに改造されているが、ミューズの方は母屋とは切り離されて独立した小住宅として使われている。もともとミューズを持つようなタウンハウスは環境のよい上流階級向けの邸宅街としてつくられているから、ミューズハウスはいまや利便性と閑静な環境を備えた高級都市型住宅である。また、洒落たショップやパブなどに転用されているものも少なくない。

### ミューズを持つタウンハウス街区の敷地割 (マルリポーン)

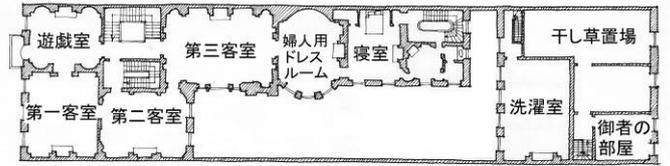


出典) 小沢明『都市の住まいの二都物語』

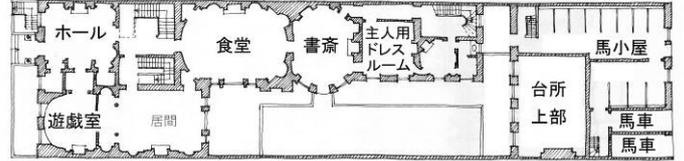
### ホランドパーク・ミューズ (Holland Estate)



### ミューズハウスを持つタウンハウス グロヴナー・スクエア (1773) の住宅



2階平面図



1階平面図

出典) N.ショウナワー『世界の住まい6000年  
③ 西洋の都市住居』

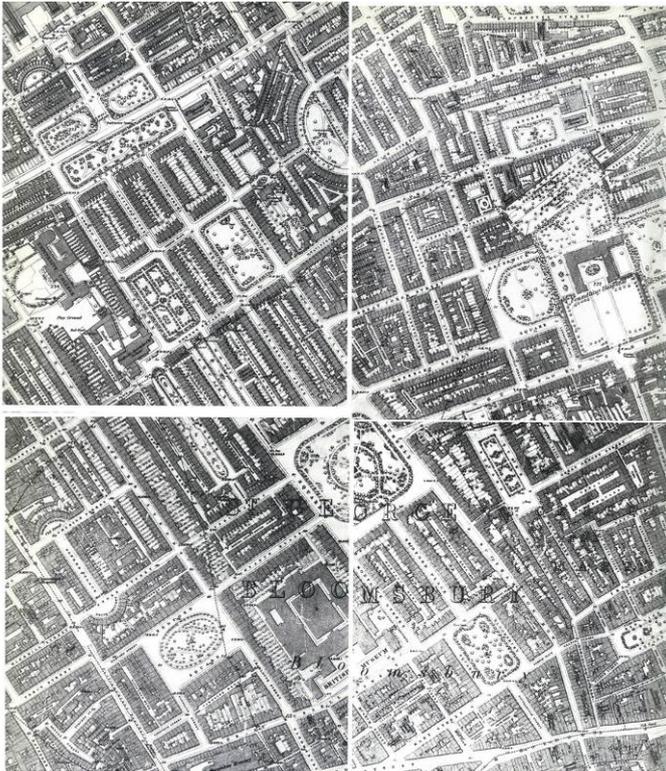
### ミューズの入りローイトン・ミューズ (Belgravia)



### キナートン・ストリート (Belgravia)



タウンハウス・スクエア開発のプラン  
ベッドフォード・エステート



出典) Stefan Muthesius, *The English Terraced House*

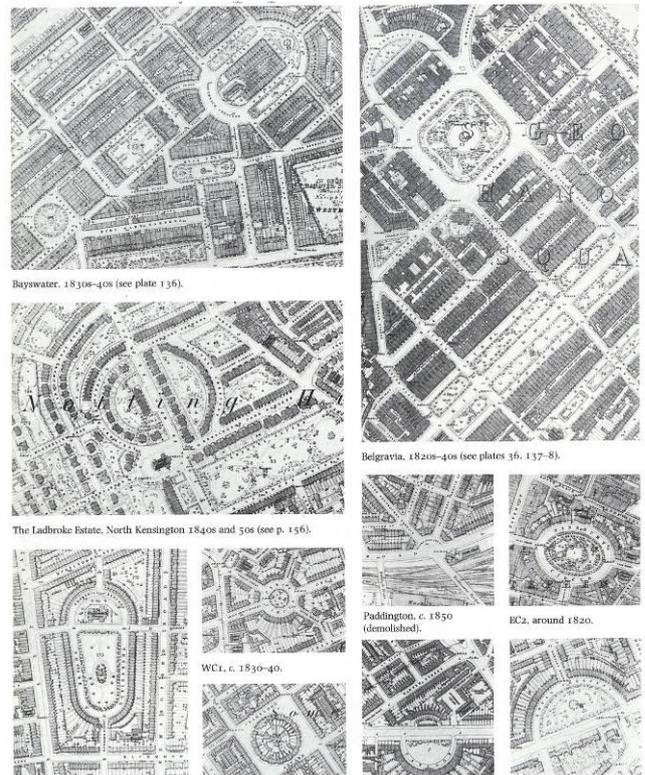
(3) タウンハウスとガーデン・スクエア

タウンハウスの建ち並ぶ住宅地は、17世紀半ばから19世紀にかけて、当時ロンドンに地所（エステート）を所有していた貴族階級が自らの土地を投機的に開発することによって形成されてきた。ロンドンのエステート開発は、いずれもその主要な場所に広場（スクエア）を持っているので、タウンハウス・スクエア開発とも呼ばれている。広場のある住宅地を初めてロンドンに紹介したのは4代目のベッドフォード伯爵である。1630年、自らの地所の開発に着手したベッドフォード伯爵は、四角形の大きな広場（スクエア）の周囲にアーケードを持つ荘厳な家並みをつくりあげて大成功を収めた。これ以降、四角い広場に面した住居に住むことが貴族や富裕な人々にとって当世風だと考えられるようになり、多くのスクエアがロンドンで建設されるようになったと言われる。

タウンハウス・スクエア開発のプランをみれば、地主貴族によって開発されたエステートが共通のレイアウト原理に基づいてつくられていることがわかる。それぞれのエステートは主要な場所に広場（スクエア）とそれを取り囲むタウンハウスを配置し、その周囲を短冊状の街区に背割り状に2列に配置されたタウンハウス群が取り囲んでいる。

スクエアと総称される広場は、その形態によってスクエア（四辺形）、サーカス（円形）、クレセント（三日月形）、プレイス（辻広場）と呼ばれ、その規模も様々で、それぞれの場所の個性をつくり出している。

スクエアの様々な形態



Bayswater, 1830s-40s (see plate 136).

Belgravia, 1820s-40s (see plates 36, 137-8).

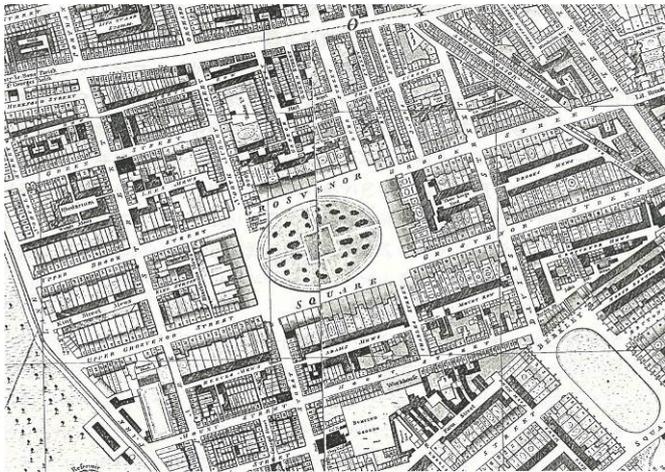
The Ladbroke Estate, North Kensington 1840s and 50s (see p. 156).

W.C.1, c. 1830-40.

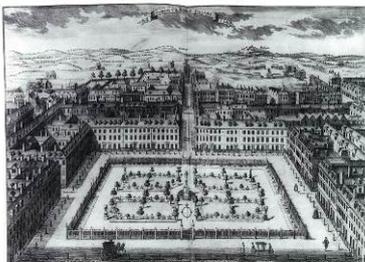
Paddington, c. 1850 (demolished).

EC2, around 1820.

グローヴァー・スクエア



18世紀ロンドンのスクエアのデザイン



17) Janus Nikolic, *View of Piazza del Campo*, engraving, c.1720. British Museum, London.



18) Simon Nicholls, *View of Piazza del Campo*, engraving, c.1720. British Museum, London.



19) Simon Nicholls, *View of Piazza del Campo*, engraving, c.1720. British Museum, London.

出典) Todd Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden 1700-1840*

出典) Stefan Muthesius, *The English Terraced House*

ロンドンのスクエアは、初期には舗装された広場であったが、18世紀の末イギリス風景庭園が広くイギリス社会に定着していく頃に、柵で囲まれた緑地を持つものに変化し、ガーデン・スクエア（庭園広場）と呼ばれるようになる。

ガーデン・スクエアは、田園地帯にある、あるがままの自然を都市空間のなかに求めて造られた空間と言ってよい。イギリス人の誰もが田園にあこがれ、田園的な趣味を持っているので、建物が密集する都会のなかで緑を眺め、緑にふれあえるガーデン・スクエアは、彼らの好みにぴったりであった。大陸の広場が、いずれも象徴性や劇場性を追求するものであるのに対して、イギリスのスクエアは住民の生活の快適さと田園性（田舎らしさ）に価値をおくものであり、決定的な違いを持つものとなった。これこそまさにイギリス人の国民性と文化を反映するものと言える。

ガーデン・スクエアは本来、それを取り囲むタウンハウス・グループの住人のみが利用できるプライベート・ガーデンで、周囲は美しくデザインされた鉄柵で囲まれ、庭園に入る鍵は住人のみに与えられた。ただし、現在ではパブリックに開放されているものも少なくない。タウンハウスは、基本的に各戸の専用庭を持っていない。ガーデン・スクエアでの家族の戸外でのレクリエーションは、彼らにとっては公的な生活の一部であった。

また、窓越しに見えるガーデンの眺めは、タウンハウスにとって最大の価値で、ガーデンをよく眺められる2階には必ず客間が設けられている。

タウンハウスの住人は、一人一人では決して持てない、立派な庭園のある暮らしが楽しめる。だからタウンハウスは、都市に集まって住む共同体の利点を好事に表していると言える。

### 窓越しに見るガーデン



### 上空からみたガーデン・スクエア ーベルグレイヴ・スクエア

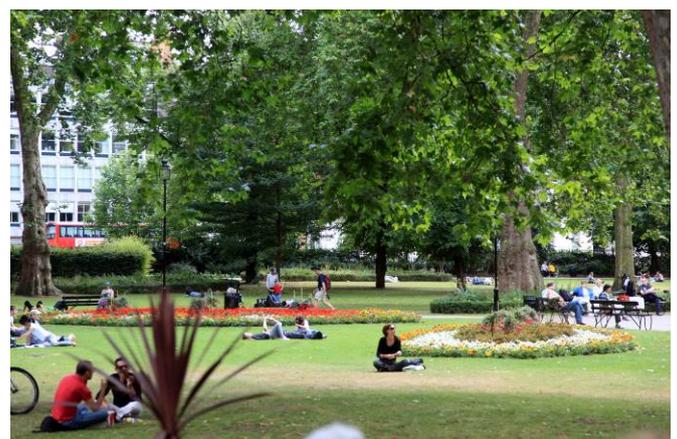


出典) ロバート・キャメロン、『ロンドン空中散歩』

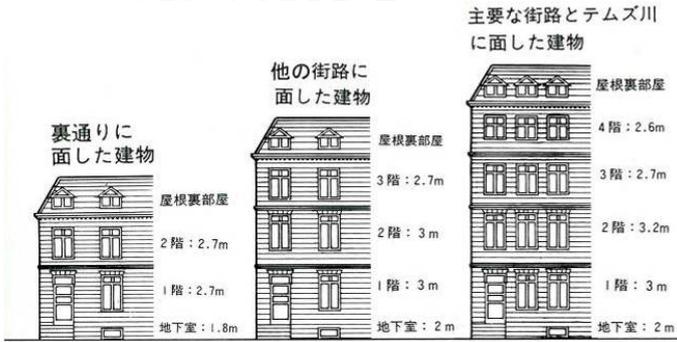
### プライベート・ガーデン



### パブリックに開放されたガーデン ーラッセル・スクエア



## ロンドン再建法による住宅建築基準

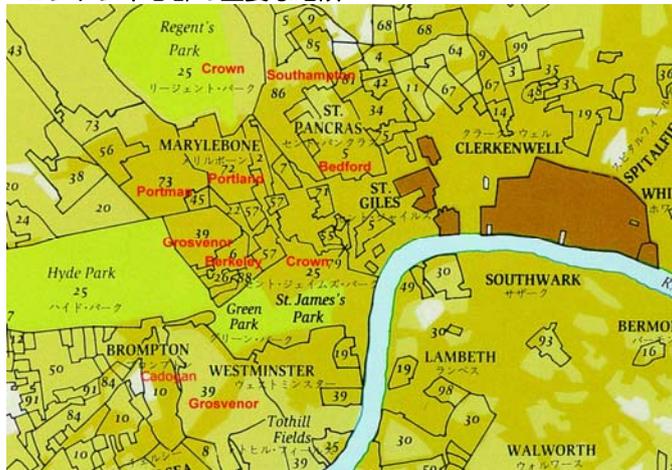


出典) ヒュー・クラウト編『ロンドン歴史地図』

## 建築年代の多様性を示す町並み ーリンカーンズ・イン・フィールズ



## ロンドン中心部の主要な地所



出典) ヒュー・クラウト編『ロンドン歴史地図』

## ロンドン中心部のエステート開発



出典) E. Jones & C. Woodward, A Guide to the Architecture of London

## (4) タウンハウスの町並みとその特性

1666年、この年に有名なロンドン大火(The great fire)が発生し、シティの市街地の80%が消失した。このロンドン大火の翌年、1667年にロンドンでは再建法(Rebuilding Act)が定められ、それまでの木組みの建物が禁止されるなど、建築規制の大幅な強化が図られることとなった。

建物は煉瓦造または石造とすることが定められ、また住宅建築については、「規則性、画一性、優美さを向上させるため」建物の階数、高さ、各階の高さなどが前面の道路の種類によって大きく4つのタイプに区分され、統一されることとなった。大火後のタウンハウスの建設は、そうした新しいルールに基づいてすすめられることとなった。その後、建築基準は何度も改訂されてはいるが、我々が今日見るような整然と統一された町並みができ上がった最も大きな理由は、この時のロンドン再建法にあると言ってよい。

そうした全体の統一性とは別に、タウンハウスの各建物のファサードは住み手や建築家の個性、独自性を主張していて、多種多様である。200年以上の時を経たタウンハウスは、その間に住戸単位で建替や改造が行われていて、異なる時代の異なる様式が渾然一体となって、多様性に富む町並みを形成している。これもタウンハウス固有の特性と言える。

## (5) ロンドン・ウェストエンドのエステート開発

ロンドンの中心部、シティの西側に広がるウェストエンドと呼ばれる一帯では、17-18世紀に集中的に住宅地開発がすすんだ。このあたりは、16世紀にヘンリー8世がウェストミンスター寺院等の所有していた土地を自らのものとし、その後貴族階級に所領として分け与えた地域だ。シティの西側一帯はほんの一握り(100人ほど)の王族、貴族階級の地所(エステート)となっていた。ロンドン大火の後、貴族たちは競って自らの地所を投機的に開発するようになる。エステート開発は、これらの地主貴族が自らスクエアを建設し、周辺の土地を区画して建設業者に建設地賃(Building Lease)として貸し付ける方法ですすめられた。開発エリアはまるでパッチワークのように拡大していった。タウンハウスに住むのは当初は貴族や富裕層に限られていたが、やがては中流階級や職人と呼ばれる人々を含む幅広い階級の住まいとしても広まっていった。

現在のロンドンの中心部は、これらの大地主によるエステート開発が連なってできあがったと言ってよい。それ故、ロンドンは集落の集合する大きな村だと言われることもあるくらいだ。

17世紀半ばから19世紀末に至るロンドン中心部のエステート開発を記した左の図には、全体で70のエステート、151のスクエアが示されている。

## (6) 17～19 世紀の住宅デザインの変遷

17 世紀から 19 世紀にかけて、タウンハウスのデザインも大きく変化した。

17 世紀の建物で現存するものは少ないが、初期のタウンハウスは貴族階級や富裕層の邸館として建てられたので、彼らの趣味を反映して古典主義的である。この時代のイギリスでは、イタリア後期ルネサンスの建築家アンドレア・パラディオによって確立されたパラディオ様式と呼ばれるシンプルで重厚、対称の調和を重視するデザインが多く用いられた。

18 世紀に入ると中流階層も数多くタウンハウスに住むようになり、住宅のデザインもよりシンプルなものになる。ジョージアン・テラスと呼ばれるこの時代の住宅は、派手さはないけれども落ち着きのある美しい町並みを形成し、最もロンドンらしさを感じさせる景観を創りだしている。

19 世紀ビクトリア朝（1837～）に至ると、イギリスは産業革命を遂行し、最も繁栄した時代を迎える。19 世紀には建物の大きさが、それまでとは違って変わって大きくなった。この時代のタウンハウスにはもっぱら赤煉瓦が用いられ、華々しい装飾を持つようになる。住宅の多くが多彩な装飾レンガで飾られ、当時の時代の豊かさを象徴している。白い石と赤煉瓦を縞模様にして外壁を飾る派手なデザインも流行した。

### 19 世紀のタウンハウス

グレート・ラッセル・ストリート



ボント・ストリート



### 17 世紀のタウンハウス

リンカーンズ・イン・フィールズ



セント・ジェームズ・スクエア



### 18 世紀のタウンハウス

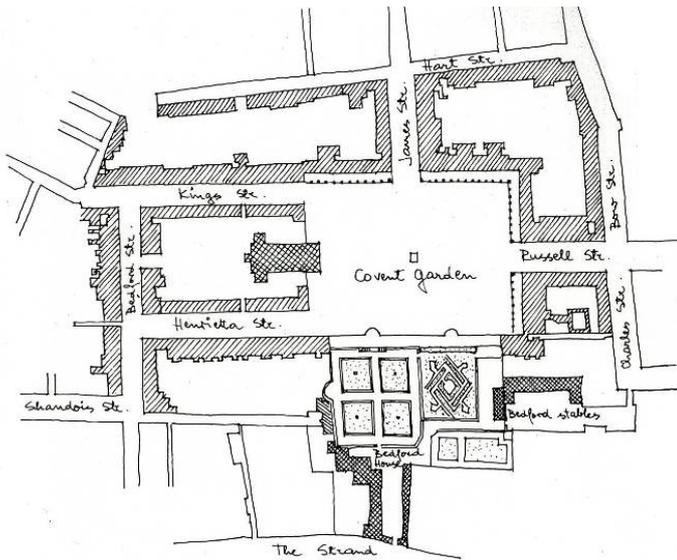
グレート・ジェームズ・ストリート



ラグビー・ストリート

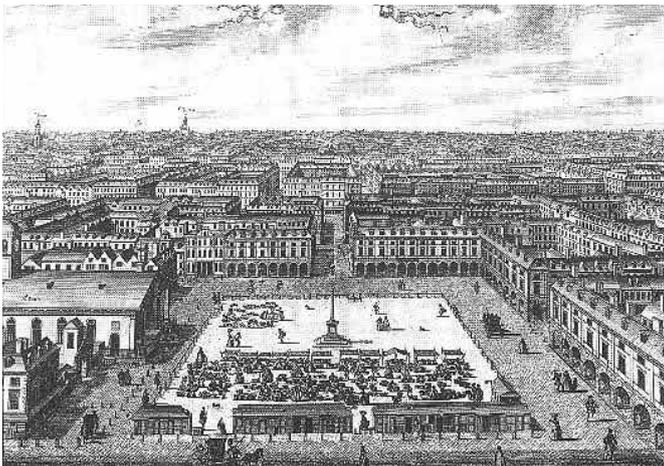


コベント・ガーデン・ピアッツァ (1630~)  
(1680-85年の地図)



出典) N.ショウナワー『世界の住まい6000年  
③ 西洋の都市住居』

(建設当初のコベント・ガーデン)



(1770-80年頃の様子を描いた図)



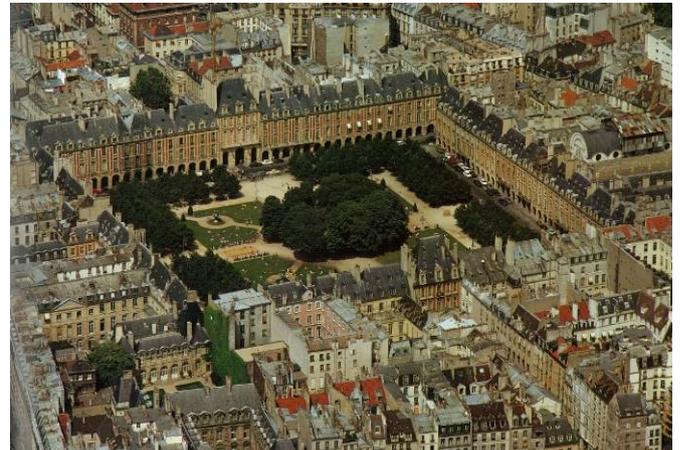
出典) ヒュー・クラウト編『ロンドン歴史地図』

2 ロンドンで最初のスクエア開発  
—コベント・ガーデン・ピアッツァ

ロンドンで最初に広場を持つ邸宅街が建設されたのはコベント・ガーデン・ピアッツァで、1630年、この土地の所有者であったベッドフォード伯爵の依頼を受けて、英国ルネッサンス建築の創始者とされる建築家イニゴ・ジョーンズ(1573-1652)がデザインした。コベント・ガーデンの四角形のイタリア風の広場を囲んで、2辺には古典的なファサードを持ちアーケードのある住宅建築が、残りの2辺には広場に通ずる2本の主要道路からよく見えるようにそれぞれ教会とベッドフォード邸の庭園が配置された。

四角い広場の周辺に宮殿を思わせるような家並みを持つ邸宅街の起源は、フランスのパリにある。17世紀の初め、アンリ4世が自ら投機事業として完成させたプラス・ロワイヤル(1605-12)、現在のヴォージュ広場は、フランスで最初の広場を持つ住宅地であった。貴族の邸宅を宮殿のように見せ、パリの中心部にも宮殿のような壮麗さを造りだそうとする試みであった。ヴォージュ広場は、それ以前には全くなかった住居形式をパリの住人に知らしめた。ベッドフォード伯爵のスクエア開発は、このアイデアをイギリスに初めて紹介したものであった。

パリ、ヴォージュ広場(1605-12)



連棟型の都市邸宅が方形の広場を囲み、独立した住環境を形成する住宅地の構成手法は、以後何故かパリに根付くことはなく、海を渡ってロンドンのスクエア開発に継承されることとなった。

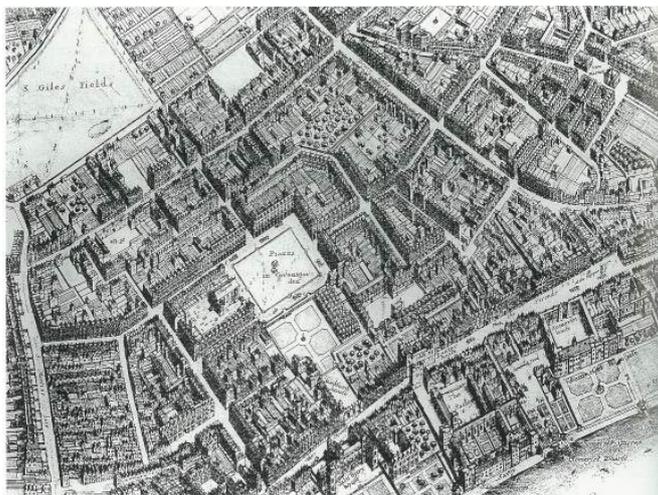
コベント・ガーデンの開発は、宮廷の人々も住む高級住宅地として成功を収めたが、その後ベッドフォード伯爵がコベント・ガーデンで毎日野菜市を開く権利を得たことによって、広場は繁華で騒然とした場所となり、その性格は大きく変化した。しかしこれを契機として、四角い広場に面した住居に住むことは、この時代の富裕層にとって当世風でふさわしいものと考えられるようになり、その後多くのスクエア開発が後に続くこととなった。

17世紀半ば以降のロンドンには、レスター・スクエア(1635～)、ブルームズベリー・スクエア(1667～)、セント・ジェームズ・スクエア(1684～)、グロヴナー・スクエア(1695～)、パークリー・スクエア(1698～)などのスクエアが次々に建設されていった。

これらの初期のスクエア開発は、コベント・ガーデンのように、地主貴族がまず自らの邸館を建て、その前面にスクエアを整備することによって始まった。スクエア整備の初期の目的は開発者の邸館を際立たせることにあり、それとともに将来の開発への先行投資でもあった。やがて時期を迎えると、地主貴族は自分のエステートの下水、道路、広場などの基盤施設の建設を行い、宅地として開発可能な区画を作り上げ、区画の賃貸を受けた建設業者によってタウンハウス建設が進んでいく。

ベッドフォード伯爵によるコベント・ガーデンの建設がその後のロンドンの住宅地開発に及ぼした影響は、計り知れないものであった。

(17世紀中頃のコベント・ガーデン)



(1650年に描かれたコベント・ガーデン)



Jan Siberechts, Covent Garden (detail), oil on canvas, c.1650. The Earl of Pembroke.

出典) Todd Longstaffe –Gowan,  
The London Town Garden 1700-1840

(現在のコベント・ガーデン)



出典) Jason Hawkens, London from the Air



### リンゼイ・ハウス (1640)

Lindsey House, Nos. 59-60 Lincoln's Inn Fields



1990年代の頃の建物の色彩



隣接する 1730年代の建物



ロンドン市内に現存するパラディオ建築  
バーリントン・ハウス (1717-18)



## 3 リンゼイ・ハウス

### —17世紀パラディオ建築の代表例

ロンドンで最も規模の大きい広場 (210×190m)、リンカーンズ・イン・フィールズもコベント・ガーデンと同時代の 1630 年代にイニゴ・ジョーンズによってレイアウトされたものと伝えられる。

この広場に建つリンゼイ・ハウスは、1640 年に建てられたもので、この周辺で最古の建築物とされる。イニゴ・ジョーンズの設計とされるこの住宅は、幅広く堅固な全体づくり、コリント式のピラスター (付け柱)、石積みの一階、頂部の手摺り子など、パラディオ風の特徴を持ち、その後のイングランドの世俗建築に多大な影響を及ぼした。隣接する 1730 年の住宅もリンゼイ・ハウスのモチーフを繰り返していて、パラディオ風の趣味が 100 年後も引き続き人気を持っていたことを示している。

この時代のイギリスの上流階級は皆イタリア文化への強い憧れを抱いていた。ギリシャ・ローマの古典文学や音楽、美術、建築などの知識は、貴族の子弟には欠かせない教養とされ、彼らは教養の仕上げとしてこそってグランド・ツアーと呼ばれるイタリア旅行にでかけたものだった。イタリアの 16 世紀ルネサンス期の建築家、アンドレア・パラディオ (1508-1580) の建築がイギリスに強い影響を及ぼしたのも、そうした背景を反映している。17-18 世紀のイギリスにはパラディオの建築の構成法をまねた建築が数多く造られ、18 世紀のイギリス建築には、パラディオ主義という言葉さえ生まれた。

この時代のパラディオ建築として現存するものとしては、このリンゼイ・ハウスのほかに第3代バーリントン伯爵リチャード・ポイルによるバーリントン・ハウス (それまでの古典様式の建物を 1717-18 年にパラディアン様式に改装)、チズウィック・ハウス (1729) などがある。

### チズウィック・ハウス (1717-18)



#### 4 ロンドン市内に現存する 17 世紀の都市住居

1666 年にロンドン大火(The great fire)があり、1677 年にも再び大火が発生したために、ロンドンに現存する 17 世紀の建物は極めて数少ない。

その中でイズリントンのニューイントン・グリーンに建つ切り妻屋根のタウンハウスは、1658 年に建設されたものでロンドン大火以前の住居で現存する数少ない事例である。この時代にシティから遙かに離れたこの場所で住宅開発が行われていたことも珍しいのではないかと思う。左から 2 番目の住宅は、後に最上階（屋根裏）が増築されている。

ロンドン大火の後、ロンドンの再建とセント・ポール大聖堂（1675-1710）を始め数多くの教会建築の設計を担った建築家クリストファー・レン（1632-1723）は、セント・ポール大聖堂の首席司祭の邸宅としてセント・ポール・ディーナリー（1672）を設計している。カーブしたドアケースや 3 色の赤煉瓦、大きなサッシの窓、スレート屋根とコーニスなど、この時代の住居の特徴を示す完璧な例とされ、国宝級のグレード I 登録建築物（Listed Building）の指定を受けている。

キングス・ベンチ・ウォーク。1677 年の大火の翌年に建設された美しい赤煉瓦のタウンハウスで、建物の一部はクリストファー・レンによって設計された。セント・ポール・ディーナリーのデザインと多くの共通点を示している。この住宅もグレード I 登録建築物（Listed Building）の指定を受けている。

この一帯（Inner Temple）は、第二次世界大戦時ドイツ軍の空襲によって大規模に破壊されたが、幸いにもこれらの建物は被害を免れた。

リンカーンズ・イン・フィールズのニューカッスル・ハウス（1684）は、リンゼイ・ハウスと並ぶ 17 世紀の大邸宅で、18 世紀にはトマス・ペラム＝ホールズ（Tomas Pelham-Holles, Duke of Newcastle, 初代ニューカッスル公爵でイギリス首相も務めた政治家）が住んだことなどで知られる。

ニューイントン・グリーン（1658）

Nos. 52-55, Newington Green



セント・ポール・ディーナリー（1672）

St Paul's Deanery



キングス・ベンチ・ウォーク（1678）

King's Bench Walk

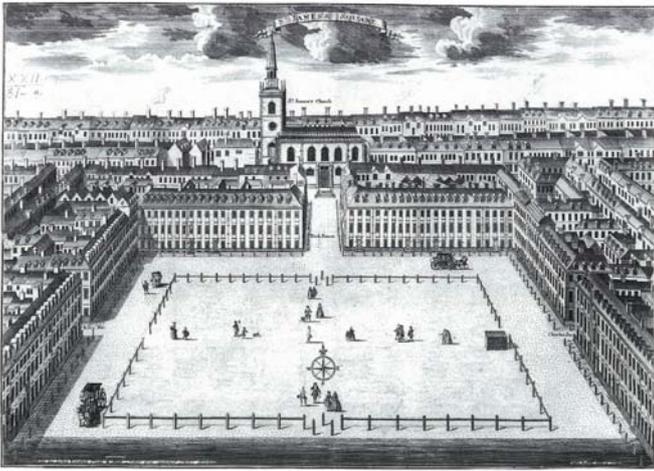


ニューカッスル・ハウス（1684）

Newcastle House, No. 66 Lincoln's Inn Fields



セント・ジェームズ・スクエア (1663～)  
St. James's Square (1750 年に描かれた図)



204a Sutton Nicholls, *St James's Square*, engraving, c.1750. British Museum, London.

出典) Todd Longstaffe –Gowan,  
*The London Town Garden 1700-1840*

この広場はウィークデーにはパブリックに開放され、週末は住民専用のプライベート・ガーデンとなる。



セント・ジェームズ・スクエアの建物  
No. 4 St. James's Square



5 セント・ジェームズ・スクエア

ロンドンの一等地であるセント・ジェームズ地区一帯はイギリス王室の地所である。この地区で唯一の広場、セント・ジェームズ・スクエアは、国王チャールズ2世から広場と周辺の土地を与えられたセント・アルバンズ伯爵によってロンドンでも有数の高級邸宅街として開発された。以来 200 年以上にわたってこの広場はロンドンで最も由緒ある高級住宅地としての地位を占めていた。この場所は宮殿やホワイトホールの官庁街にも近いことから、1720 年代には7つの公爵家、7つの伯爵家がこの広場に居を構えていたと言われる。19 世紀になるとクラブハウスや業務施設等への転用が進み、富裕層の多くは新たに開発されたベルグレイヴィア地区等へ移動するが、その後もいくつかの建物は高級な邸宅として利用され続けている。

この広場には現在も 17-18 世紀の建物のいくつかが当時の姿で残されていて、登録建築物 (Listed Building) 指定を受けた建物も少なくない。

No. 4 は 1676 年に建設された当時の姿が手つかずに残されていて、ロンドンで最も印象的なパラディアン・タウンハウスと言われている。

No. 5 は 1748-9 年建設の邸宅で、19 世紀に石材の化粧張りが加えられ、4 階部分が増築されている。

No. 5 St. James's Square



No. 10 (Chatham House) は 1730 年代の建物で、歴代首相 3 人が居住したことで知られる

No. 15 (Richfield House) は 1763-66 の建物で、美しい正面を含み大部分が建設当初のままに残されている。

No. 20 の建物は 18 世紀後半、イギリスに新古典主義建築を広めたことでとられるロバート・アダム (Robert Adam, 1728-1792) の設計によって 1771-75 年に改築されたもので、彼の作品の中でも最も優れたものの一つに数えられる。

No. 10 St. James's Square (Chatham House, 手前の建物)



No. 20 St. James's Square



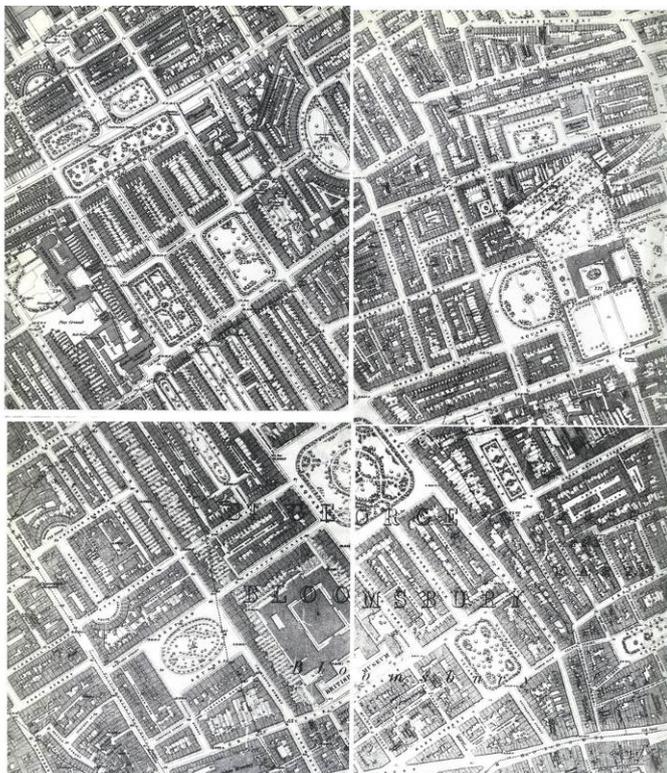
セント・ジェームズ・スクエアの建物  
No. 4, 5 St. James's Square



No. 15 St. James's Square (Richfield House)



## ベッドフォード・エステート 1870年の地図（再掲）



出典) Stefan Muthesius, *The English Terraced House*

## 現在のベッドフォード・エステート



出典) *London: The Photographic Atlas*

## 6 ブルームズベリー

### (1) ベッドフォード家のエステート開発

ブルームズベリーの広大な地所（エステート）は、1550年、王室からサザンプトン伯爵家に授けられたもので、サザンプトン家はロンドン大火の直後にここでエステート開発に着手した。最初の開発はブルームズベリー・スクエア（1667）であった。一方ベッドフォード公爵家（ラッセル家）は同時期にコベント・ガーデン一帯の地所（コベント・ガーデン・エステート）を王室からもらっていた。両家は17世紀を通じてそれぞれ別々に地所を経営していたが、18世紀にはいって両家の婚姻や相続のために、ブルームズベリーのサザンプトン伯爵家の地所は、ベッドフォード公爵家のエステートの一部に組みこまれることになった。こうしてロンドンにおける二つの重要な地域にまたがる巨大エステートが誕生した。この巨大なエステートの開発は、1630年代に始まって1820年代に至るおよそ200年にも及ぶものであった。

ベッドフォード公爵家は、18世紀末にブルームズベリーの地所の本格的な開発に乗り出す。エステートの開発と経営は、一貫してベッドフォード不動産部によって行われた。このブルームズベリーの計画は、それ以後のロンドンのエステート開発のモデルとなり、計画の規範を示すものとなった。計画の狙いは地域全体にガーデン・スクエアを散在させ、そのまわりに建物をまとめることにあった。スクエアの形は、正方形や長方形、半円形と様々であったが、どれもが中央に芝生とプラタナスの庭園を囲んでいる点に大きな特徴があった。緑地を囲んだ広場は大通りの往来からは遠く、閑静で落ち着いた環境を保っている。ブルームズベリーの広場の樹木は決して枝を払わなかった。プラタナスはあたかも田園の中にも立っているかのごとくのびのびと育っている。窓の外にはいつも青葉の影があり、樹木の生い茂る美しい光景がある。樹木は全て広場の中央にまとめることによって、家屋に少しでも樹木の陰ができるのを避けている。

ユーストン通りやオックスフォード通りのような幹線道路から入る道は門で閉じられ、ブルームズベリーに用のない人々はこの地区に入ることが認められなかった（それは門の廃止を議会が決定する1893年まで続いた）。それぞれの広場には環境維持のための厳しい内規がある。賃借人とベッドフォード不動産部との契約書には、賃借人はその家屋を店舗や飲食店に使ってはならないこと、如何なる種類のものであっても看板を立ててはならないことなどが定められている。ベッドフォード不動産部がこの時代から、その広場の中の水準を一定に保ち、家々の価値を保つことをエステート経営の基本においていたことが分かる。

## (2) ブルームズベリー・スクエア

ブルームズベリー・スクエアは、この地区における開発の最も初期のもので、セント・ジェームズ・スクエアと並んでロンドンでも最も長い歴史を持つ。サザンプトン伯爵家によって開発されたので初期にはサザンプトン・スクエアと呼ばれた。1754年に描かれた図に見るように、広場はサザンプトン家の邸宅（Bedford House）の正面（南側）につくられ、邸宅を引き立たせる役割を担っている。19世紀に邸宅は取り払われ、新たなタウンハウスが付け加えられている。

この広場には建設当時17世紀の建物は一つも残っていないが、18世紀から19世紀初期に建設された美しい建物が数多く残されている。



## (3) ベッドフォード・スクエア

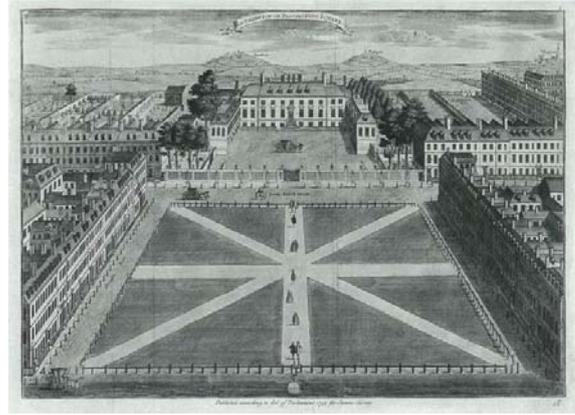
ベッドフォード・スクエアは、18世紀末にベッドフォード公爵家がブルームズベリーの地所の開発に着手して最も初期に建設された広場で、Thomas Revatonによってデザインされた。当時台頭してきた中流上位階層（upper middle）が住んだ居住地の典型例を示すものとされる。また広場を取り囲む4辺の住宅群の全てが建設当時の姿をそのままとどめている数少ない例のひとつで、この時代の住宅のなかで最も良く保存されている。約50の建物がグレードI登録建築物（Listed Building）の指定を受けている。また1917年からAA（Architectural Association）School of Architectureがこの広場を校舎として利用している。

広場は現在もプライベート・ガーデンである。



## ブルームズベリー・スクエア（1667～）

Bloomsbury Square（1754年に描かれた図）

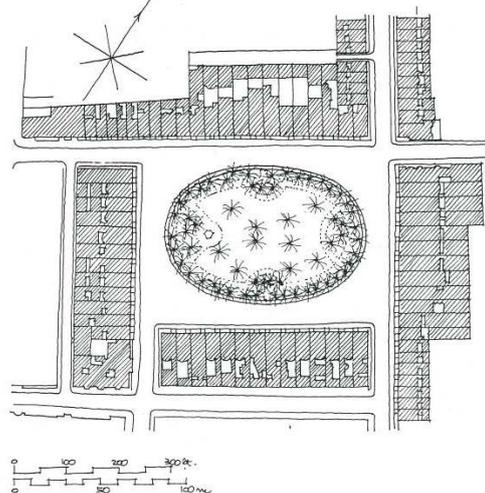


出典) Todd Longstaffe –Gowan,  
The London Town Garden 1700-1840



## ベッドフォード・スクエア（1775～80）

Bedford Square



出典) N.ショウナワー 『世界の住まい6000年  
③ 西洋の都市住居』



## ラッセル・スクエア (1801~1805)

Russell Square



## (4) ラッセル・スクエア

ベッドフォード公爵家の姓に因んで名付けられたラッセル・スクエアは、ロンドンでリンカーズ・イン・フィールズに次ぐ2番目の規模(160×160m)を持ち、ブルームズベリー地区のガーデン・スクエアの中心的位置を占める。この広場もベッドフォード広場と同様に主として中流上位階層(upper middle)を対象とする住宅地として開発された。

またこの広場は、ピクチャレスクの造園家として知られるハンフリー・レプトンによって計画され、ロンドンの都市広場に風景式造園術の原理が導入された最初の例となった。広場は、現在はパブリックに開放され、近隣にロンドン大学の本部を始め関連施設が多いことなどから、大学生などで常に賑わっている。

このラッセル・スクエアは第二次世界大戦時に大きく破壊されたが、戦後再建されている。



## ブルームズベリーのその他の広場

タヴィストック・スクエア (1820年代)

Tavistock Square



## クイーン・スクエア (1716~25)

Queen Square



## 7 メイフェア

### (1) グロヴナー家のエステート開発

グロヴナー・エステートもベッドフォード・エステートと並ぶ広大なエステートであった。きっかけは 1677 年にトマス・グロヴナー卿がメアリー・デイヴィス嬢と結婚し、デイヴィス家の資産を相続したことで、グロヴナー家はハイパークの東のメイフェアに 100 エーカー (40ha)、ハイパークの南、ベルグレイヴィアからピムリコにかけての 400 エーカー (160ha) の地所を保有することになったのであった。

グロヴナー家は 17 世紀末からメイフェアの開発を始め、1770 年代にそれを完成させる。できあがった地区は上品で、豊かで、華やかなものであった。19 世紀の文人シドニー・スミスはこの時代のメイフェアを「富や美はいうまでもなく世界でかつてないほど知性と能力を集めた地区」と評している。18 世紀末から 19 世紀にかけて、この一帯には大邸宅が建ち並び、多くの貴族が住む所むとなった。

### (2) グロヴナー・スクエア

グロヴナー・スクエア (1695~1720) は、メイフェアの中心的な広場であり、ロンドンで最も歴史と伝統のある広場のひとつとされる。初期に建設された住宅は5つないし7つの窓を持つ大邸宅で、建物の高さは3階プラス屋根裏部屋で統一されていたが、多くは 19 世紀に建て替えられ、より高さの高い建物に変わっている。

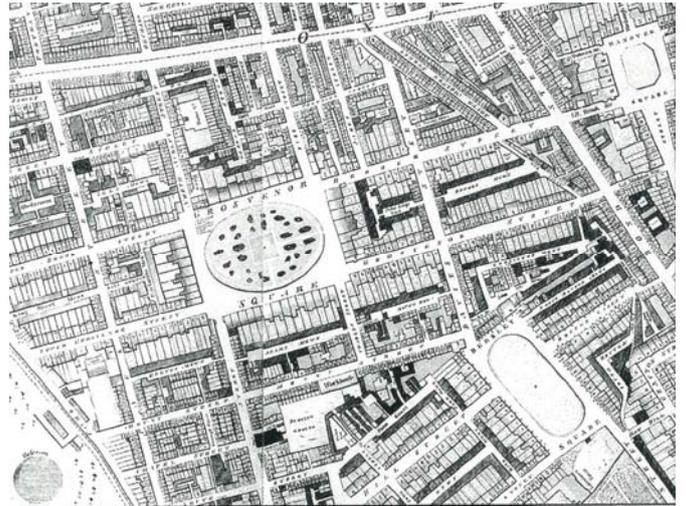
20 世紀には大半の建物が建て替えられ、ホテルや大使館、アパートに転用された。1960 年には広場の西側一辺を占める形でイーロ・サーリネンの設計によるアメリカ大使館が建設された。2008 年に大使館はワズワースのナイン・エルムズ地区に移転することが決定し、現在準備が進められつつある。



出典) ロバート・キャメロン『ロンドン空中散歩』

## メイフェア

Mayfair, 1799 年の地図



出典) ヒュー・クラウト編『ロンドン歴史地図』

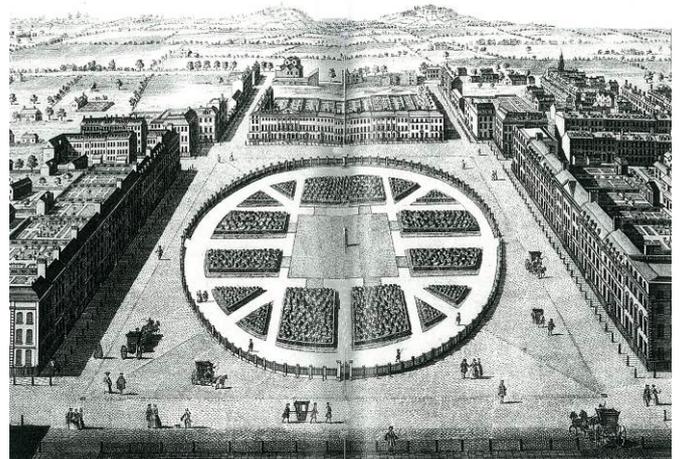
### 上空から見たメイフェア地区



出典) ロバート・ハマロン『ロンドン空中散歩』

### グロヴナー・スクエア (1695~1720)

Grosvenor Square, 1754 年の版画



出典) ヒュー・クラウト編『ロンドン歴史地図』

## グロヴナー・スクエアの住宅



Nos. 8-9 Grosvenor Square



グロヴナー・スクエアに現存する 18 世紀の建物としては、No.8, No.9, No.12 及び No.38 がある。これらはいずれも現存する 18 世紀の住宅の中でも最も魅力的なものとして評されている。

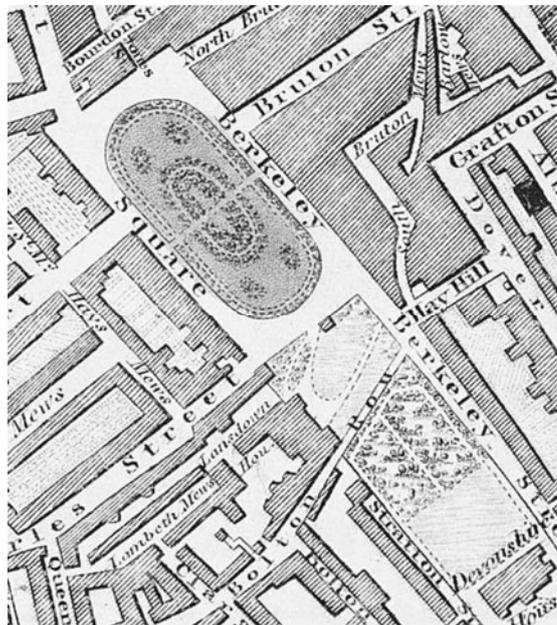
No.12 Grosvenor Square

No.38 Grosvenor Square



## パークリー・スクエア (1742~1744)

Berkeley Square



### (3) パークリー・スクエア

パークリー・スクエアは、18 世紀、新古典主義建築家として活躍し、また造園家としてイギリス風景式庭園を考案したことで知られるウィリアム・ケント (1685~1748) によってレイアウトされた。この広場で彼自身が設計した No.44 の住宅は、「ロンドンで最もすばらしい連続住宅」と評されている。

この広場のプラタナスの木は 1789 年に植えられたもので、ロンドンの中心部に植えられた樹木として最も古いものとされる。

No.44 Berkeley Square



## 8 18世紀初頭のタウンハウス

### (1) クイーン・アンズ・ゲイト

18世紀初頭のロンドンの住宅にはクイーン・アン様式（Queen Anne style）と呼ばれるスタイルが登場してくる。アン女王の在位期間（1702～1714）にほぼ対応していることからそう呼ばれる。ペディメント（破風）のない無装飾のレンガの正面と矩形の上げ下げ窓を持つ規格化された住宅で、ただ玄関だけに集中的に装飾が施されている。もっぱらローカルな建設業者、設計者によって建てられた土着的なものである。

ウェストミンスター・クイーン・アンズ・ゲイト（1704年頃）は、この時代の典型的な住宅で、Grade I Listed Buildingとして登録されている。

### (2) ラグビィ・エステート

ホーボーンのラグビィ・エステートの一帯には、1720年代、ジョージ朝初期（1714～）の住宅が数多く残されている。1707年と1709年に建築規制が強化され、防火性能を向上させるために屋根をパラペットで覆うこと、コーニス（蛇腹）を石造とすること、木製の窓枠を外壁面から後退させることなどが定められた。またオランダで発明された矩形のサッシュ窓（上げ下げ窓）が流行し、それまでのケースメント（両開き窓）に取って代わるようになった。このようにしてジョージ朝タウンハウスの外観上の特徴が生み出されていった。

ラグビィ・ストリートの界隈は1720年代に建設された通りである。この通りの住宅にはファサードの前のドライエリアに小さな「英国式庭園」が設けられている。ファサードに平行した棟が2本あるふた山の屋根を持ち、装飾は玄関口に集中的に施されている。いずれもジョージ朝初期に生まれた新しい様式の典型を示すものと言える。

グレート・ジェームズ・ストリートも1720-30年につくられた通りで、この時代のものとしては最も良く保存されている。

### グレート・ジェームズ・ストリート（1720年代）

Gt. James Street



### クイーン・アンズ・ゲイト（1704年頃）

Queen Anne's Gate



典型的なジョージ朝タウンハウスを描いたアクソメ  
ピーター・ウィルソン『ロンドンジョージ王朝の建設技術』による



### ラグビィ・ストリート（1720年代）

Rugby Street



## スピタルフィールズの住宅

Elder Street



Fournier Street



No.37 Spital Square (1719)



No.15 Elder Street (1723-24)



No.18 Folgate Street



(3) スピタルフィールズのウィーバーズ・ハウス  
スピタルフィールズの一帯には、1720年代に建設されたタウンハウスが当時の姿のままで残されていて、この時代の住宅の典型例を見ることができる。

17世紀末、この一帯はフランス人プロテスタント（ユグノー教徒）移民の定住地として開発された。彼らのなかに多くの絹織物職人（weavers）がいて、このあたりは絹織物産業の中心地となった。シティの北東に位置するこのあたりの住宅は、ブルームズベリーやメイフェアなどのウェストエンドの住宅地に比べて質素で庶民的、立派なガーデン・スクエアも備えていない。

彼らの家は今でもフォーニアー・ストリート、エルダー・ストリートの両側に見られる。最上階（屋根裏）の仕事場に織物職人のために陽光を最大限に取り込めるように設けられた横長の窓（weavers' windows）と、凝った造りの美しい玄関が、ユグノーのタウンハウス（weavers' house）の特徴とされる。また赤煉瓦で縁取られたアーチ状の窓が18世紀初期の特徴を示している（Cityの外側であったため、窓は壁面からセットバックしていない）。

この一帯では1960年代から都心業務機能の進出によって古い建物の取り壊しがすすんだが、非営利法人スピタルフィールズ・トラスト（Spitalfields Trust, 1977年設立）などが歴史的建造物の保全活動に取り組んでいる。またその後、保存・修復された古い住宅にアーティストなどが住み着くようになり、この地域に注目が集まるようになった。

## 9 ジョージ朝ロンドンのタウンハウス

ジョージ王朝期（ジョージ1～4世の在位した時代、1714～1830年）の代表的なタウンハウスをいくつか紹介することとする。

### ホーム邸（1774-76）

新古典主義建築家として名高いロバート・アダム（1728-92）の設計によるこのホーム邸（現在はロンドン大学コートールド美術研究所）は、ロンドンにある最も美しい住宅のひとつとされ、アダムスタイルと呼ばれる壮麗なインテリアを有している。

### ポर्टランド・プレイス No46-48（1774）

これも R. アダムの代表作とされる。二軒が連続した住宅でありながら、その中央にジャイアントピラスターとペディメントからなる神殿正面を貼り付け、一軒の大邸宅に見せかけている。後に郊外で用いられたセミディタッチト・ハウスの先駆とも言えるもの。

### フィッツロイ・スクエア（1790-94）

R. アダムによって設計された東面、南面は、前面をポर्टランド石で仕上げられ、この時代のロンドンでも最も高い水準のデザインで統一されている。西面と北面は、後に19世紀に建設されたもので前面の仕上げもスタッコ仕上げに代えられているが、アダムのデザインを尊重して建設された。第2次世界大戦の戦災を受けたが後に再建され、現在も4面が全て統一されたデザインのままで残されている。

### チェイニーウォーク（18世紀初頭～）

チェルシー地区の歴史的な通りとして知られるこの通りには18世紀の最も美しいタウンハウスがよく保存されている。

Gate PostとIron Workに特徴がある。

No.3-6は1717年建設の初期ジョージアン・テラス、No19-26は1760年建設の住宅で優美な姿を示している。

Nos 20-21 Portman Square (Home House, Robert Adam, 1774-76)



Nos.46-48 Portland Place (Robert Adam, 1774)



Fitzroy Square (Robert Adam, 1790-94)



No.3 Cheyne Walk (1717)

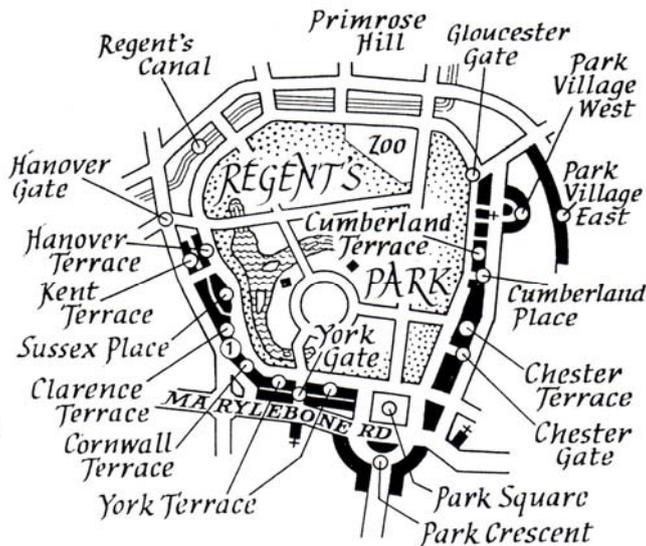


No.19 Cheyne Walk (1760年代)



## リージェンツ・パーク (1811~1826)

Regent's Park



出典) R.サルバドリー『建築ガイド・ロンドン』



出典) London: The Photographic Atlas

### パーク・クレセントとパーク・スクエア



出典) ロバート・キャメロン『ロンドン空中散歩』

## 10 王室による都市開発：リージェンツ・パーク

リージェンツ・パークとその周囲を取り巻く壮大なテラスハウス群の開発は、19世紀の初めイギリス王室によって行われた。この場所は古くからイギリス王室の狩猟場で、長く荒地であったが、この時代、ロンドンの市街地の拡大は既にこの近くにまで及んでいた。1811年、摂政(Regent)の地位についた皇太子(後のジョージ4世)は、直ちにこの場所の開発に取りかかることとし、ジョン・ナッシュ(John Nash, 1752-1835)に計画の立案を依頼した。計画の目的は、ここをロンドン市民のための公園にするとともに、勃興しつつあった富裕層のための住宅を建設することにあった。ジョン・ナッシュは、建築家、都市計画家であると同時に開発業者でもあり、1813年には宮廷都市計画家に就任した。彼は公園をデザインし、周囲の住宅群をレイアウトし、自ら多くの建築の設計も手がけて、1811年から1826年の間にこのプロジェクトを成し遂げた。

公園は、直径が1マイル(1.6km)、外周が4.3kmの円形で、約160haの面積を有する。その外周を約3kmの長さに及ぶテラスハウスが取り囲んで都市の壁を造っている。その全てがスタッコ(白漆喰)仕上げの宮殿風の建物で、前面に列柱を並べた壮麗な古典様式で統一されている。これらのテラスハウスは、都市の住居群であると同時に公園を引き立てるための重要な要素でもあった。即ちこれらの建物は、19世紀に新たに生まれた「市民」のための空間を盛り上げる舞台装置としての役割を担っているのである。

ジョン・ナッシュの当初の計画案は、今日の姿よりもさらに壮大なものであった。当初の構想ではこの土地に摂政のための宮殿と側近のための邸宅を建設し、公園の外周を二重、三重に建物が取り囲み、公園内にも多くの邸宅が計画されていた。しかし、実行段階で宮殿建設は取りやめとなり、財政的理由もあって計画は大幅に縮小された。結果的に今日見るような公園の自然の造形と、テラスハウスの都市的な造形との鮮やかな対比が実現することとなった。

リージェンツ・パークには、公園の入り口にあたる南端のパーク・クレセントを中心に左右に11の巨大なテラスハウスが建ち並んでいる。その中でもナッシュが設計したカンバーランド・テラス(1826)は最も壮麗なものである。全長が244mのこのテラスハウスは、古代ローマ風の壮大なスケールの列柱を持ち、中央部に巨大なペディメントをそびえさせた左右対称の建物で、連続住宅であるにもかかわらず全体が一つの宮殿のように造られている。「都市の中の自然に面した市民のための宮殿」というリージェンツ・パークの開発コンセプトがもっともよく表れている。

リージェンツ・パークの北東端に「パーク・ビレッジ」(1823-34)と呼ばれる小規模な戸建、二戸建の住宅群がある。この住宅地は、ジョン・ナッシュが公園周辺のデザインの一環として、また彼のもう一つの夢の実現として、自ら建設事業を引き受けて造った住宅地であった。公園の周囲を取り囲む大規模なテラスハウスとは対照的に、小規模で各戸が独立した住宅を仕切りのない連続した庭園の中に不規則に配置し、極めて田園的な住環境を実現している。ナッシュが公園デザインの目玉として新たに開削したリージェンツ・カナルによって「イースト」と「ウェスト」に別れていて、運河の水が住宅地の修景上の要素として活かされている。ナッシュの造ったこのピクチャレスク・ビレッジは、後に19世紀後半のロンドンで誕生した田園郊外に先鞭をつけるものであったと言える。

ジョン・ナッシュは、摂政皇太子の強い支持を受けて、摂政(Regency)時代(1811-20)、ジョージ4世の在位期間(1820-30)を通じて、リージェンツ・パーク、リージェンツ・ストリートの開発を始め、数多くの建築をロンドンに残した。それ故、彼はいまでは「ロンドンを造った建築家」と呼ばれている。

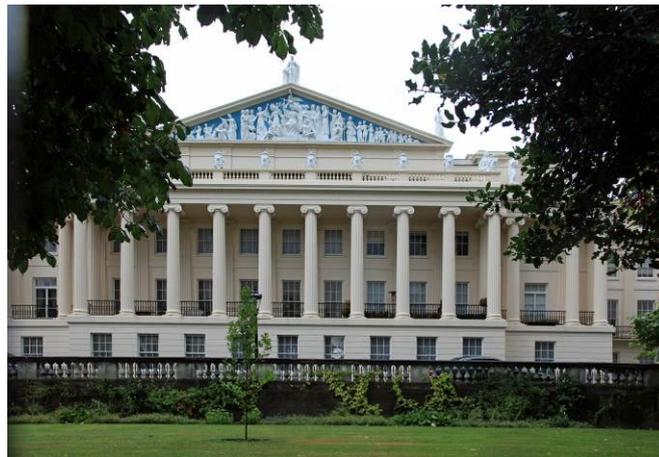
また、彼がリージェンツ・パークで用いたスタッコ仕上げの外壁、局面の壁に窓の付いたボウ・ウィンドウ、アイアンのバルコニーなどのデザインは、リージェンシー様式と呼ばれ、その後の19世紀半ばの住宅建築に大きな影響を及ぼすことになった。

Park Village (John Nash, 1823-34)



## リージェンツ・パークの住宅

Cumberland Terrace (John Nash, 1826)



Chester Terrace (John Nash, 1825)



Cornwall Terrace (Decimus Burton, 1821-23)



York Terrace (John Nash, 1826)



## サー・ジョン・ソーンズ博物館 (1772-1833)

Sir John Soane's Museum, Nos.12-14 Lincoln's Inn Fields



平面図 出典) 長谷川堯『ロンドン縦断  
ーナッシュとソーンが造った街』

### 建物内部の様子



出典) Sir John Soane's Museum

### リンカーンズ・イン・フィールズの町並み



## 11 サー・ジョン・ソーンズ博物館

ロンドンで最も古い広場のひとつであるリンカーンズ・イン・フィールズに、18世紀から19世紀にかけて活躍したイギリスを代表する古典主義建築家ジョン・ソーン(1753-1837)の自邸であり彼のコレクションの展示館でもあるサー・ジョン・ソーンズ博物館がある。

ジョン・ソーンもまた若い頃にローマに留学し、地中海の古典建築の研究に没頭した。帰国後、次第に独自の古典主義建築家としての地歩を固めて行き、大成して英国建築界の重鎮として活躍したのであった。ソーンの建築デザインのイメージ・ソースは、古代の地中海、特に古代ローマにあったが、彼は設計の傍ら、古代美術品や建築装飾の各部分を精力的に収集し、その分野のコレクターとしても知られるようになっていた。ソーンは若いときから自分の建築デザインの資料としていたこれらの古代美術品のコレクションを一般に公開したいと考え、そのための展示館として自邸の一部を使う構想を温めていた。そして1772年から約40年の歳月をかけて三軒のタウンハウスを購入し、改築、新築を重ねこの建物を完成させたのであった。

広場の12番から14番に発つ三軒のタウンハウスは、いずれも典型的なジョージアン・タウンハウスであった。最初1772年、ソーンが39歳の時に建物の左側12番の家を自宅兼設計室として購入、さらに1808年から12年にかけて隣の13番の家を取得して現在の展示空間にあたる主要部分の改造に取りかかった。そして最後に1824年に14番の家を買い取り、この家を取り壊して12番の建物と同じ窓割と階高で全く新しいファサードをつくり、これによって三軒の家を左右対称形のまとまった建築複合体として完成させた。こうして彼の死の4年前、1833年に博物館が誕生した。

建築を一種の総合芸術に高めることを目指したソーンは、この建物の内部自体を詩的な空間とすることを意図していた。数多く設けられた採光用の天窗や多彩な色合いのガラス窓、無数の鏡などによって、建物内部には自然光が満たされ、複雑な美的空間シーンが創り出されている。

17世紀半ばにレイアウトされてから既に350年以上の年月を経ているリンカーンズ・イン・フィールズの建物は、各年代にユニット単位での建替、改築が繰り返されてきた。この結果、今では様々な年代の建物、それぞれの住み手の個性を表すファサードが多様性豊かな町並みを創りだしていて、実に魅力的である。

この広場には、W.モリスのレッドハウスの設計者として知られるフィリップ・ウェブのデザインした住宅もこの博物館と同じ並びに建てられている。

## 12 ベルグレイヴィア

### (1) ベルグレイヴィアのエステート開発

グロヴナー家の広大な地所、ベルグレイヴィア地区は、ハイパークの南、バッキンガム宮殿の西側一帯に広がっている。1820年代の初めまで、この一帯は沼地であったが、1825年にジョージ4世がセントジエームズ公園の西端にあったバッキンガム館を宮殿にするためにジョン・ナッシュに改築を命じたことを契機として、湿地の水を抜いて住宅地として造成することが盛んになり、ロンドンでも最も高級で優雅な邸宅地に変貌を遂げていく。

1824年、グロヴナー伯爵は建築家で建設業者でもあったトマス・キュービットにこの地区の開発を依頼した。これ以後キュービットは建築家のジョージ・バスヴィとともにベルグレイヴィア一帯の開発を進めていく。これによって彼は19世紀のこの時代、ロンドンで最大規模の開発事業者となった。

ベルグレイヴ・スクエアとイトン・スクエアを中心とするベルグレイヴィア一帯の住宅は、いずれも大邸宅で、リージェンシー様式と呼ばれる真っ白なスタッコで仕上げられた古典風の建物で統一されている。邸宅群の裏側には迷路のようにミュージアムが張り巡らされ、魅力的に路地空間を創りだしている。

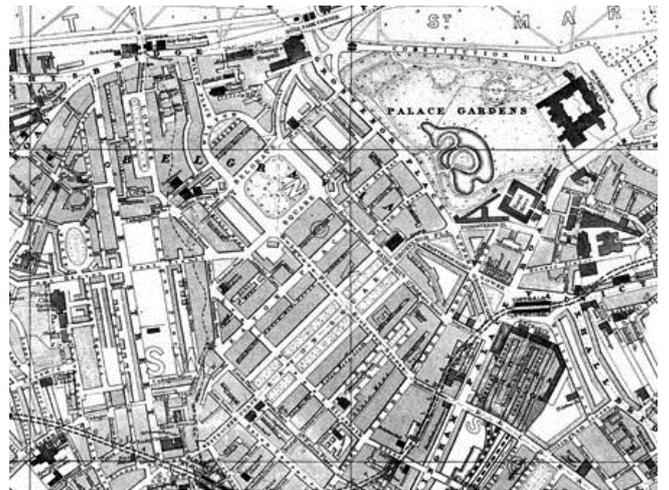
隣接するハンズ・タウンなどでは、ジョージ朝時代の建物が後にビクトリア期の派手な建物に建て替えられていったが、この地区にはそうした建物は持ち込まれず、また第二次世界大戦による戦災も免れ、現在も地域一帯が建設当時の姿をとどめている。

この地域は開発当初からロンドンで最も優雅な住宅地となり、貴族階級を代表する人々や多くの富豪の居住地となった。またその後多くの大使館がこの地域に建ち並ぶこととなった。ベルグレイヴ・スクエアを始めとして、現在もこの地域には数多くの大使館が立地し、地域を特徴付ける要素となっている。

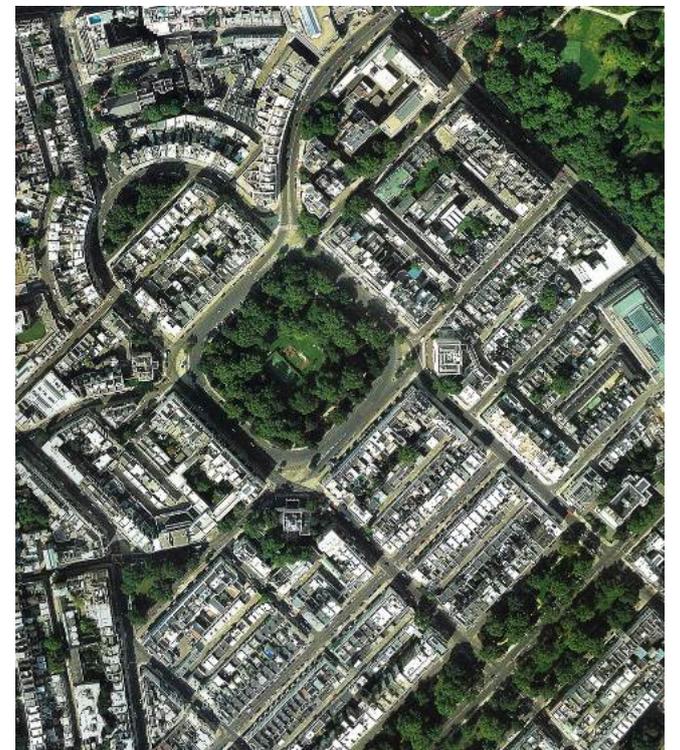
第二次世界大戦後、この地域の大邸宅の多くから貴族階級や富裕層が姿を消し、建物は住宅以外の用途に転用されるようになった。しかし新たな用途は大使館や特定のオフィス、弁護士などの専門職のための事務所などに限定され、店舗やホテル、近代的なオフィス等への改造は制限されてきたため、他の地域とは異なり現在もなお閑静な住宅街としての雰囲気を保ち続けている。しかし現在ではこれらの建物は余りにも高額な物件となり、多くの建物が海外の富裕層の所有となり、普段は居住者が不在の建物も少なくない。そうした環境が近隣の社会的関係を喪失させているという指摘も少なくない。

### ベルグレイヴィア

Belgravia, 1888年の地図



上空から見たベルグレイヴィア



出典) London: The Photographic Atlas

ベルグレイヴ・スクエア (1820s)  
Belgrave Square



出典) ロバート・キャメロン『ロンドン空中散歩』

(2) ベルグレイヴ・スクエア

ベルグレイヴ・スクエアは、ベルグレイヴィアで最初に開発された、中心的広場で、19世紀につくられた広場のなかでは最も大規模かつ雄大な広場である。トマス・キュービットによってレイアウトされ、建物はジョージ・バスヴィによってデザインされた。

約140m四方の広場を囲む4棟の建物は、1棟が11戸の邸宅からなるテラスハウスで、コーナー部には専用庭を持つ12戸の独立住宅が建てられている。建物はそれまでのロンドンのエステート開発では建てられたことのない大規模なものであった。

ベルグレイヴ・スクエアの北西には、この広場と一体となった三日月型のウィルトン・クレセントが配置されていて、特徴的な形態を示している。

(3) イートン・スクエア

ベルグレイヴ・スクエアの完成から10年ないし15年を経た1840年代に、トマス・キュービットはイートン・スクエアとその周囲の列柱のある建物とミュージズを設計した。幅100m、延長が約450mもある長大なガーデン・スクエアは6つのブロックに分割されている。広場を取り巻く住宅は、いずれもが3つの窓を持つ大規模な邸宅で、4-5階建てに加えて屋根裏部屋と地下室、そして背後のミュージズハウスを有している。建物の多くは白亜のスタッコで仕上げられているが、ここではレンガ仕上げの住宅も混在している。

第二次世界大戦より以前、イートン・スクエアは高級住宅地ではあったが、ベルグレイヴ・スクエアやグロヴナー・スクエアのように貴族階級や富豪の住むような場所ではなかった。しかし、第二次世界大戦これらの第一級の広場の建物用途が商業的用途やオフィスに転換したことから、住宅地としての用途を維持してきたイートン広場は、代わって第一級の住宅地としての地位を占めるようになった。現在は多くの建物がこれらを管理するグロヴナー・エステイトによってフラットまたはメゾネットに改造されている。



イートン・スクエア (1840s)  
Eaton Square



出典) ロバート・キャメロン『ロンドン空中散歩』

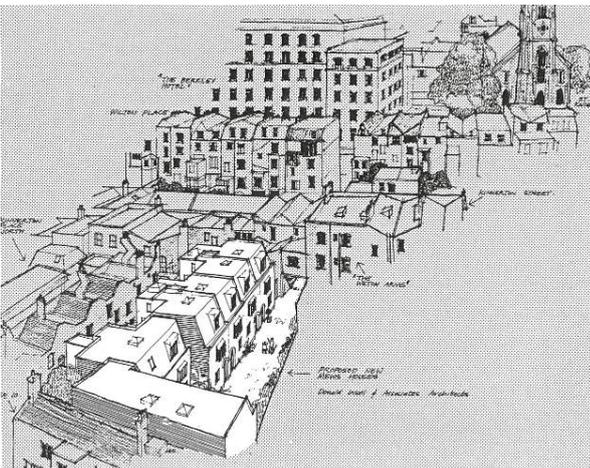


#### (4) ベルグレイヴィアのミュージズとミュージズ開発

ベルグレイヴィアは最高級の住宅地として建設されたので、大半の住宅が背後にミュージズとミュージズハウスを持っている。この点が地区の大きな特徴とも言える。かつては馬小屋と馬車の置き場、干し草置き場や御者の部屋として用いられたミュージズハウスも、今では閑静で落ち着いたものがある、高級住宅へと変貌している。特にこのベルグレイヴィアのミュージズは、クレセントの背後の曲線を描く通りや直角に屈折する通りなど様々な路地を持ち、変化と多様性に富む独特の魅力を備えている。

このベルグレイヴィアでは、ミュージズの魅力を活かしたインフィル開発も行われている。キナートン・ストリート沿いのボウランド・ヤードはその典型例で、タウンハウスの敷地の背後の部分に、敷地内の狭い路地（private mews）に沿って8戸の新たなミュージズハウスが建設されている。周辺環境に溶け込むような慎重な開発で、親密なコミュニティの感覚を持つ優れたプロジェクトになっている。

#### ボウランド・ヤードのミュージズ開発



出典) イアン・コフーン/ピーター・フォーセット『ハウジング・デザイン：理論と実践』

#### ベルグレイヴィアのミュージズ

##### Grosvenor Cottage



##### Kinnerton Street



##### West Eaton Place Mews



##### Eaton Mews South



ビクトリア朝のタウンハウス  
メルリボーン・ハイストリート  
Marylebone High Street



ポント・ストリート (1878)  
Pont Street (Knightsbridge)



出典) Jason Hawkes, *London from the Air*



### 13 ビクトリア朝ロンドンのタウンハウス

ビクトリア女王(1837~)の即位した1830年代、イギリスは1760年代に始まる産業革命を完成させたと言われる。イギリスは最も繁栄した黄金期を迎え、富裕層が拡大するとともにロンドンのタウンハウスもその様相を一変させる。第一に建物のスケールが一回りも二回りも大きくなり、質素で落ち着いたあるジョージアン・テラスや古典風のリージェンシー時代の建物に代わって、赤煉瓦の派手なデザインを伴った建物が登場した。ジョージ朝の古いタウンハウスも次々にそうした新しい建物に建て替えられるようになり、街の様子も大きく変化していく。

#### (1) メリルボーン

リージェンツ・パークの南側に位置し、今やロンドンでも最もファッショナブルな街となったウェストミンスターのメルリボーン一帯は、18世紀にポートマン家のポートマン・エステート及びポートランド家のポートランド・エステートとして開発されたが、19世紀には多くの建物が新しい様式で建て替えられた。

なかでもメルリボーン・ハイストリートに建ち並ぶ建物は、ビクトリア朝タウンハウスの特徴をよく表している。壁面は以前には用いられなかった赤煉瓦で構成され、白い石と赤煉瓦を縞模様で組んで外壁を飾る派手なデザインが施されている。また屋根は大きな装飾破風が飾られている。

贅沢で派手な装飾を持つ建物は、大英帝国の絶頂期の様子を今に伝えているかのようである。

#### (2) ポント・ストリート

ナイツブリッジのポント・ストリートに建ち並ぶ住居群は、Osbert Lancasterによってデザインされ、1878年に建てられた。赤煉瓦造でオランダ風の大きな装飾破風を持つことから後にPont Street Dutchと名付けられた。Pont Street Dutchは1880年代のロンドンで大流行し、その後メイフェア地区など広い範囲に広まっていった。



### (3) サウス・ケンジントン

ハイパークの南西に位置するサウス・ケンジントンは、19世紀半ばまではロンドンに野菜や果物を供給する農業地帯であった。1851年にハイパークで開催された大博覧会（Great Exhibition）の後、博覧会当局がこの地域に約35haの用地を取得し、芸術と科学の振興のための研究拠点を創設した。これによってその後この一帯には大学や自然史博物館、科学博物館などの博物館もつくられ、大英博物館のあるブルームズベリーと並びユニークな文教地区に発展した。

この大博覧会後の変化を契機として、1860年代以降サウス・ケンジントンでは住宅開発が活発に行われるようになる。1868年には地下鉄も整備され、これによって開発ブームが起こった。この一帯は19世紀後半のロンドンの住宅地開発の中心地であった。

この地域の幹線道路であるクロムウェル・ロードを中心として、一帯には堂々たる円柱で飾られたビクトリア朝様式の邸宅が建ち並んでいる。規模の大きな邸宅が集中していて、それらに付随する素晴らしいミュージーズが数多く見られる。

サウス・ケンジントンの一帯にはフランス人が多く住んだために、フランス人学校やフランス料理店などの関連施設も集中し、フランス的でシックな雰囲気を持つこともこの町のユニークな特色となっている。

The Boltons



サウス・ケンジントンのミュージーズ



### サウス・ケンジントンのタウンハウス



Cromwell Road



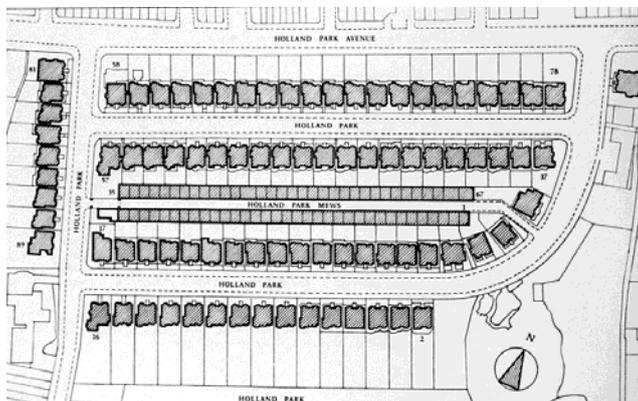
Harrington Gardens



ホランド・エステート (1823-74)  
Holland Estate (Kensington & Chelsea)



ホランドパーク (1858-72)  
Holland Park



出典) LCC, Survey of London: Vol37, Northern Kensington



(4) ホランド・エステート

ノース・ケンジントンのホランド・エステートはホランド伯爵家の500エーカー(約200ha)に及び地所のうち200エーカー(約80ha)余りを1823-74年の50年余りの年月をかけて開発したもので、区域内にはかつてのホランド邸の跡地が公園として残されている。

区域内には大小様々なタイプの住宅地が開発されているが、最も後期に建設されたホランド・パーク(1858-72)は、この時代のロンドン郊外の高級住宅地開発を代表するものとなった。東西方向の2つの通り(Holland Park)に沿って建ち並ぶ90戸の住宅は連続するテラスハウスではなく、全てが独立した邸宅として造られている。イタリアン・ヴィラ風の建物はFrancis Radfordによる設計で、きめ細かな装飾が施され白亜のスタッコ仕上げで統一されている。

中央のホランドパーク・ミュージズには、邸宅の敷地とは分離されたミュージズハウスが、全戸数分一か所にまとめて設けられている。ミュージズハウスは邸宅のほぼ半分の間口で計画されていて、厩舎の上部に御者のための住宅を備えている。ホランドパーク・ミュージズの町並みは、ロンドンのミュージズのなかでも最も美しいものと言ってよい。

ホランドパークの建物は、邸宅もミュージズハウスも建設当時の姿のままによく保存され、その全てが登録建築物(Listed Building)に指定されている。ホランドパークは、今ではロンドンでも最も高価な住宅地のひとつとなり、ここにも多くの大使館が立地している。

公共公園として利用されている同名のホランドパーク(22ha)は、ロンドンでも最も親しまれている公園のひとつとして知られている。公園内には、京都庭園(1991)及び福島記念公園(2012)の二つの日本庭園も設けられている。

ホランドパーク・ミュージズ  
Holland Park Mews



## 14 アーツ&クラフツの住宅建築

1860年代ウィリアム・モリスを中心にして開始されたアーツ&クラフツ運動は、イギリスの芸術精神の復活、生活と芸術の一致をめざす運動であった。彼らは中世の手仕事を再評価し、イギリスの土着的な建築や工芸の復興を主張していた。過去の様式にとらわれず、イギリスのバナキュラーな建築をベースにした新しいデザインの実現を目指すアーツ&クラフツの建築は、ロンドンのタウンハウスにも大きな影響を及ぼした。19世紀最後の四半世紀、ロンドンの各地にアーツ&クラフツ・ハウス（Arts & Crafts House）あるいはショウ・スタイル（Shaw Style）と呼ばれる住宅が数多く建設されていった。

### （1）リチャード・ノーマン・ショウの住宅

アーツ&クラフツの建築運動において中心的役割を担ったのがリチャード・ノーマン・ショウ（Richard Norman Shaw, 1831-1912）であった。彼は19世紀後半のイギリスで最も多くの作品を残し、その後のイギリスのみならずアメリカにも多大な影響を及ぼした建築家であった。

ノーマン・ショウは、「クイーン・アン様式（Queen Anne Style または Queen Anne Revival）」と呼ばれる独自の様式を確立した。それは18世紀初期（アン女王が在位した1702-1714年の頃）のイギリスの赤煉瓦を用いた土着的な都市住宅を参照しつつも、様式の一貫性を否定し、自由に様式を選択し混合させるという手法を用いたピクチャレスクなデザインで、フリークラシックとも呼ばれている。彼のクイーン・アン様式は、イギリスで最初の田園郊外とされるベッドフォード・パーク（1875）の住宅デザインで、芸術の香りの高いピクチャレスクな住宅建築として広く知られるようになった。同時に彼はロンドンの数多くのタウンハウスの設計を手がけている。

彼の確立したスタイルは、ショウ・スタイルとも呼ばれ、その後多くの建築家がこのショウ・スタイルのデザインを手がけるようになった。

テムズ河沿いのチェルシー・エンバンクメントに建つスワンハウス（1875）は、ノーマン・ショウの代表作でクイーン・アン様式の特徴をよく表している。上部が前面にせり出した建物の形態は伝統的なハーフティンバー建築の特徴であり、二階部分の出窓のデザインは17世紀中頃のイギリスで好まれたもの、また上階の極端に細長い窓はクイーン・アンの時代のものである。建築史家のニコラス・ペプスナーは、これらの各時代の様式を繊細で洗練された形で組み合わせていることこそがショウ・スタイルの特徴で、他に見られない独自のもの、と評している。

### リチャード・ノーマン・ショウの住宅 スワン・ハウス（1875）

Swan House, No.17 Chelsea Embankment



The Clock House: No.8 Chelsea Embankment



## Nos.9-11 Chelsea Embankment



4階建てで地下室とドーマー（屋根窓）を持つこの建物は、事務弁護士で美術品収集家の Wickham Flower の住宅として建てられた。Flower はこの建物の内装をウィリアム・モリスの会社に依頼している。

スワン・ハウスのデザインはこの時代に極めて高い評価で迎えられた。Jones と Woodward は、彼らの"Guide to the Architecture of London"でスワン・ハウスをロンドンに建つ Queen Ann Revival 建築のなかで最も美しい作品と讃えた。1954 年にスワン・ハウスは Grade II\* 登録建築物に指定されている。

チェルシー・エンバンクメントには、スワン・ハウスのほかに:The Clock House: No.8 Chelsea Embankment や Nos.9-11 Chelsea Embankment など、ノーマン・ショウがデザインした6つの住宅がある。

## ハンズ・タウン：The Red Rose City Hans Town (1887年のマップ)



出典) London Borough of Chelsea & Kensington

## カドガン・スクエア Cadogan Square



## (2) ハンズ・タウン：The Red Rose City

Knightsbridge から Sloan Square の間に広がるハンズ・タウンの建設は、18 世紀の後半 チェルシー一帯に地所を保有していた Sir Hans Sloan によって開始され、後にカドガン家に引き継がれた。地区の開発は、1775-1825 の約 50 年間に建築家でデベロッパーの Henry Holland の手によってすすめられた。

しかし当初建設されたジョージアン・テラスは 1860 年代になると既に魅力を失い、一部は荒廃した様相を呈するようになった。そうした状況を受けて 1875 年、この一帯の再開発を進めるために Cadogan and Hans Place Estate Company が設立された。会社の代表となった W.T.Makin は、この時代に台頭してきたクイーン・アン派の建築に強く惹かれていて、彼らを起用してハンズ・タウンの再開発をすすめることを決定する。1874 年以降 1890 年頃までに、集中的にこの地域の再開発がすすめられ、ハンズ・プレイス、カドガン・スクエア、カドガン・プレイス、カドガン・ガーデンズなど、地区全体が赤煉瓦の Queen Anne Revival 様式の建物に建て替えられた。これによってハンズ・タウンは今日の The Red Rose Town と呼ばれる個性的な姿に生まれ変わり、一帯の住宅地としての評価も格段に高まっていった。

ハンズ・タウンの中でも特にカドガン・スクエアにはクイーン・アン派を代表する建築家によってデザインされた歴史的に重要な建築が多い。No.62, 68, 72 は、ノーマン・ショウの作品である。No.52, 61 は、Ernst George と G. A. Peto による最も初期の高級アパート（Mansion Block）で 1879 年に建設された。特に No.52 は、ハンズ・タウンの建築的特徴とその精神を表す優れた事例とされる。

ハンズ・タウンの一帯は、今日、ケンジントン&チェルシー区によって保存エリアに指定されている。

カドガン・スクエア  
Cadogan Square



No.68 Cadogan Square,  
R. Norman Shaw

No.72 Cadogan Square,  
R. Norman Shaw

No.52 Cadogan Square,  
Ernst George & G.A.Peto



カドガン・ガーデンズ  
Cadogan Gardens

ハンズ・ブレース  
Hans Place



ハリントン・ガーデンズ  
Nos.35-45 Harrington Gardens



Nos.39 Harrington Gardens



Harrington Gardens の町並み



(3) サウス・ケンジントンのアーツ&クラフツ・ハウス

既に述べたように、サウス・ケンジントンの一帯は1860年代以降、ロンドンのエステート開発の中心地として注目を集めるようになった。特に1870年代後半からはこの一帯に当時大いに流行したアーツ&クラフツ様式、ショウ・スタイルの住宅建築が集中的に建設されることとなった。

なかでもハリントン・ガーデンズとこれに近接するコリンガム・ガーデンズは、ロンドンでも最も個性的な通りのひとつに数えられる。この一帯は1872-1891年の間に当時ロンドンで最も進歩的な建設事業者として知られた Peto 兄弟会社によって開発されたもので、Ernst George と Harold Peto のデザインによるアーツ&クラフツ・ハウスが際だった特徴をつくりだしている。Nos. 35-45 Harrington Gardens は、その代表的なものとされる。

カリンガム・ガーデンズ  
Callingham Gardens (1880-88)



## 15 マンション・ブロックの登場—タウンハウスの時代の終焉

19世紀も最後の4半世紀を迎える頃には、ロンドン市内のタウンハウスは中流階層にはとても手の届かない高価なものになった。彼らは遠い郊外に住むか、市内でも貧困層が住むような地域にハウスを求め、いずれかの選択を迫られるようになる。

そうしたジレンマを解決するために、ついにロンドンにも積層型の集合住宅、マンション・ブロック（Mansion Block）が登場する。ロンドンの人々は、長く維持してきた彼らの住居のスタイルを捨てて、フランス式の居住スタイルにあわせ始めたのであった。中世以来、イニゴ・ジョーンズのネオ・パラディアン、ジョージアン、ビクトリアンへと受け継がれ、ロンドンの個性を形作ってきた連続するテラスハウスの歴史に幕が下ろされることになった。

イギリス人はこのときからマンション・ブロック（アパート）の彼らの一室を“flat”（平ら）という奇妙な呼び方をするようになった。主人の家族と召使いや使用人が別々の階にいたかつてのハウスでの暮らしに代わって、全員が同じ階で生活するようになったことからこの呼び名が付いたとも言われている。

ロンドンで最初のマンション・ブロックが建設されたのは、1870年のことであった。その後、しばらく不況が続き建設が途絶えたが、1890年代半ばから1905年の間には数多くのマンション・ブロックが建設されている。なかでもアルバート・ホールの近くに建つノーマン・ショウとR.J.ウォーレイのマンションは傑作と評されている。

### ロンドンのマンション・ブロック

Albert Court (R.J.Worley, 1894-1900)



Albert Hall Mansions (Richsrd Norman Shaw, 1879)



112 Jermyn Street (Reginald Morphew, 1900)



Alexander Court (Paul Hoffman, 1900)



Buy Street (G. Thrale Jell, 1909)





(筆者略歴)

佐藤 健正 (さとう たけまさ)

1967年 東京大学工学部都市工学科卒業  
 株式会社都市開発コンサルタント(現株式会社浦ハウ  
 ジング&プランニング)入社  
1987～98 取締役・大阪事務所長  
1998～08 代表取締役社長  
2008～14 取締役会長  
2014～ 顧問  
  
1992～96 大阪大学工学部建築学科非常勤講師  
1999～13 (社)都市計画コンサルタント協会理事  
 (2007～ 副会長 2009～2013 会長)  
2002～09 集合住宅研究会代表幹事

『図説ロンドンのタウンハウス』

2015年10月改訂

佐藤 健正

